

shiwase 3.0 の開催校として

主任 渡部 博志



(shiwase 3.0 閉会時の集合写真)

国連の定める世界幸福デー（3月20日）の翌日、武蔵野大学有明キャンパスにて shiwase 3.0 を開催いたしました。このイベントは、昨年、一昨年と慶應義塾大学で開催されていましたが、今回、ご縁があって本学で開催するに至りました。

イベントそのものの内容は、何らか別の形でお伝えできるかと思っておりますので、今回は開催校という立場からかかわったことをお伝えしようと思っております。

今回はしあわせ研究所が共催する形となりましたが、これまでの2回の開催はいずれも来場者数が1,000人を超えるという、開催校の私たちにとっては未知の規模のイベントであり、意気込みと不安とが混在する中で準備に取りかかりました。

当日ならびに当日に向けた実際の運営は約40名にもものぼる「実幸委員」の方々を中心となって行い、当日は大きな混乱もなくイベントを開催することができました。この「実幸委員」のみなさんは、全員ボランティアで、ほとんどが仕事を持つ社会人。月に1回のペースで19時30分から3時間

近くの打合せを行うものの、全員が揃うことは一度もなく、それぞれが自分の役割をSNS上で報告しながら、お互いに補い合っ
て進めていくという組織でした。

実行委員長（今回は、研究所長である西本学長との共同という形）の前野隆司慶應義塾大学教授が中心となっていることは確かなのですが、グイグイと物事を決めてい
かれるわけではなく、あくまでも「実幸委員」の中でみなさんが発言しながらコンセンサスが形成されていきました。誰かが強力なリーダーシップを発揮して運営して
いくというわけでもなく、誰かに強いられて役割を担うこともない。それぞれが自らの
できる範囲で協力し、イベントを創り上げていくという、非常に前向きで建設的な
ものでした。

今回のイベントの副題は「みんなで幸せをカタチにする」。来場者も幸せに、そして運営する側も幸せにという、ベースとなる理念がしっかりと共有されていたからこそ、当日約1,600名の来場者を迎えたにもかかわらず、運営を全てボランティアで行うことができたのだと感じました。

想いの共有があればこそ、困難だと思われることでも道が拓けていくということ、開催校の一人として目にしました。これは、今後の本研究所の活動にも活かしていけると考えています。